明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種郵便物認可
第五十三號、每月二回(一日、十五日發行)
明治三十四年四月十五日發兒

教時報

第五十三號

社說
◉國民團結の三大要素……釋宗演

論說
◉獨尊の說……

社會
◉平和主義◉增俸問題◉感化院設備概算◉眞龍女學校の卒業◉釋尊降誕會◉紛々錄

雜錄
◉西教事情(其四)……(在伯林)文學士 近角常觀
◉臺灣たより……在臺灣 柴田常惠

令音
◉新山吹譚(承前)……文學士 甲南生

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第五十二號目次

社説
◎憲政と幕政◎童謠

論説
◎倫理の實踐は社會觀念を明にするより外なし（紀平文學士）
◎病的布教（安藤鐵腸）

社會
◎會議の閉會◎女學生の墮落

雜録
◎西教事情（近角文學士）◎先德餘香（本多文學士）

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年四月十四日印刷
明治三十四年四月十五日發行

發行兼編輯人 上村幸三郎
印刷人 橋本朝太郎

政教時報

國民團結の三大要素

左の一篇は本會の本多文學士が過日大日本佛教青年會の釋尊降誕會席上に於て演述せし所なるが今取て此欄に收む

編者識

國家といひ社會といふは一物の兩面に過ぎない、日本の國家といひ、日本社會といふ、共に此四千幾百萬の同胞、北千島より南臺灣膨湖島に至る國土を指していふので、唯見樣が異るばかりであります、斯くの如く國家といひ、社會といふも、全く同一物の異名に過ぎませぬけれども、見樣が變れば又性質も異るものであり升、即ち國家には盛衰存亡がありますから、之を維持して參りまするには、餘程善く之を保護して行かねばならぬ、併し社會は自活性を有するもので、放任して置いても開けて行くが通例であります、例へば茲に或る土地人民がある、其主權が衰へて、他の諸强國より何處の港を貸して呉れ、ドコソコに鐵道を敷設させよ、何某に鑛山の開堀權を與へよ、お前の國の關稅はオレの方で監理してやろうといふ風におれば、其土地人民を國家的眼光より見るときは、決して隆盛になるとは言へますまい、併し眼を轉じて社會的方面より見るときは、鐵道敷設といふ事業は何人の手に成るにせよ、交通の便が開けるのである、港灣築設、鑛山開堀、財政監督等何れも皆何國何人の所作であらうが、夫々うまく出來れば矢張社會文明の進達するのに相違ない、政治は何人が施さうと、主權は誰の手に移らうと、其間にズン〳〵社會は進歩するのである、夫で昔から國家の興亡盛衰といふものは、甚だ頻繁で茲に述べ立てる暇の無い程の次第であるが、社會は概して進歩發達して居る、進み方に遲速と大小はあるけれども、何れの社會も多少は進んだに違ひない、斯くの如く國家と社會といふものは大に異なる性質が有るとはいふものゝ、元來一物の兩面に過ぎないのであるから、其互に相關連して居るのは勿論である、故に國家が盛運に向て居る時は社會も順境にあるので、其進歩は速かで大きくある、一旦國家が衰運に向た日には、社會も逆境に陷りたので、其進歩發達は頗る遲く少くなる、時によりては退歩するかと思へる事もある、昔江戸から京都まで旅行するに東海道五十三次をたどる間に、道のクネリ鹽梅で三たび東を向いて歩行んで居ると申ます、彼有名な左富士の名所あゞといふも此譯から起るのです、併しながら絶えず足を運んで居る間には遂に京都に達する如く、社會の悠久なる進歩の間には、一時逆境に立て退歩する如き觀ありとも夫は決して差支はない、大勢に於ては如何も社會は進歩しつゝあるのであり升、國家が社會に及ぼす影響はマーソーいふ次第であるが、夫は前にも申す通り社會は絶えず進歩する傾向であるから、其影響も亦一本筋で、國家的活動の範圍を大きくする、互に國家と國家との關係を密接せしめる、則日本で例せば、太古都が日向に在た時分

は、朝廷の御威令も西海に行はれしのみ、大和の盛世には漸く近畿諸國より及ぼす無つた有様である、後世になりても、御一新以前といふものは、日本は惟り日本の日本で有て、其治亂盛衰の波瀾は日本海一つを渡る事も少かつた、況して太平洋を越して亞米利加に及ぼすの、亞細亞大陸を過ぎて歐羅巴に達するのといふ事は夢にも無かつた、然るに今日は日本は世界の日本で有て、其一擧一動世界中に影響する、支那でも其通りで、今日では滿洲が何の歟のと申して居りまするが、太古夏の世などでは萬國と申して、諸侯が一萬も有た、して其全範圍といへば今日の直隷、山東、山西等黃海附近の二三省に過ぎない、殷の湯王の時には諸侯は三千といひ、周の武王の時は減して八百諸侯となり、春秋には十二列國といひ、戰國には七雄となり、遂に秦の始皇帝が天下を一統した、夫からも漸々舞臺が大きくなりて、今日では支那は世界列强と如何なる程度まで關係が密接であるかは、諸君が御承知の通りである、昔羅馬の盛なる時は其版圖は驚くべき廣大なもので有た、併し其治亂興廢の影響は多くは羅馬國内に止るか、若くは四隣の地に及ぼすのみで、世界全体の上より評せば、あの大帝國の大騷亂も、今日朝鮮半島の一角へ露西亞の軍艦が一艘入港した程も世人の注目を引かない、コーいふ風に大變化を來したのは、社會の進歩が國家方面に及ぼした影響に外ならぬと申して宜しい、斯くの通りに活動の舞臺が大きくなり、仕掛けが大きくなり、關係が密接して來ると、一擧手一投足の仕事と雖も、仕損じをすると、大なる損害を受けねばならぬ、夫ですから如何に智慮あり技倆ある人と雖も、唯少數の人々に政事を打任せて置くといふ事は心配で叶はぬ、依て自然に輿論政治といふ事が發達して來た、專制君主政や少數貴族政治が衰へて、代議政體が盛になるのは、此大勢に促されたのである、それはソー無くてはならぬ筈で、前申した通り世の中の進歩と共に一擧一動關係する所が重大なるに至りし故、如何に英雄豪傑でも智者學者でも僅かの人數の力ではやり切れるものではありませぬ、ドーシテモ擧國一致の團結力を以て事に當らなければならぬ、ソーシテ見れば、此進歩した世の中に國家を維持せやうとするには否一層隆盛ならしめんとするには、則ち民心の結合を圖るは、最要急務である、併し唯一口に一致團結といひ、協力結合と言たとて、團結するにはする丈けの性分が無くては叶はぬ、協力するには必ず夫丈けの要素が必要である、團子を固めるにも水が必要である、蕎麥切を拵へるにも鷄卵や長芋が必要である、國民を團結せしむるには如何なる物が必要で有らうか、其要素たるものは固より澤山あるには違ひないが、最力の廣大なる最必要の分量の多きものは三つあるかと考へられる、何であるか、曰く一に人種、二に言語、三に宗教である、人種が異る時は如何に思想感情を異にし、利害を異にし、協力しにくいかは、我日本人の如く是まで餘り異人種と雜居しない者は知らないが、之を歐米の實例より見ますれば、過去の歷史に就て言ふも、現在の狀態に付て觀察するも、明々白々の事實で有て、決して疑を挾むことは出來ませぬ、彼等は博愛を主

義とする、夫は悉皆口先ばかりの博愛ではない、眞實其主義を信じ之を實行せやうと思ふ人も多いのであることは彼社會には慈善事業等の盛に行はれて居るので知れる、然るにも係はらず、彼等が或は亞細亞人に對し、或は亞弗利加人等に對する仕打を見ると丸で別人の樣である、慈悲も無ければ情けもなく、切取强盜より猶ヒドイ事をするといふものは、彼等の博愛主義は決して白皙人種以外の人に及ばぬからである、彼等は異人種を見るとは、犬猫同然に思て居るからである、歐羅巴でも墺匈帝國の如きは種々の人種が集りて居る、殊に墺太利と匈牙利とは二大別せられて居るから、常に一致えにくい、國會も別に開かれる、法律も別々に制定せられる、隨て人民の權利も義務も違ふ、風俗や習慣の異るは勿論の事である、我々日本から思へば一主權の下に在る同一國民でありながら、法律迄別々で有るとは、虛言の樣な話であるけれども、全く事實である、是は人種の異る所から來るので仕方が無いのである、支那の國を御覽なさい、あの大帝國には種々の人種があるけれども、大別して滿人種と漢人種との二種が最勢力が有て互に爭て仕方が無いから、政府の官吏も內閣大臣の樣な重役は必ず滿人一人漢人一人即大臣が二人づゝある事は大淸會典に據て規定した、スルト大臣が互に喧嘩して事が運ばれぬ、支那人は何事も遲緩であるといふのは、一は是より來るのである、彼等も其不利なる事を知らぬでは無いけれども、一人種に任せるといふ事は到底出來ぬので致方の無い事である、異人種の親みにくいは此通であり升、次に言語が異れば互に其思想を通ずる事が出來ぬ、御互に先方は何を考へて居るやら分らぬ、夫でドーシテ眞實親密になり、一致結合する事が出來やう、昔神聖羅馬帝國といふ樣な大きな國が在たが、現今で獨逸、佛蘭西、伊太利と三國に分れて到底統一する事は出來ぬのは、多くの原因もあるが、言語の違ふが最大なる原因である、能く引合に出される支那の如きも、頗る言語に澤山の種類があり、二三十里と距てば最早互に言語が通せぬのである、支那人が團結心が薄く、常に一致の運動を欠き失敗を取る事の多いのは、其原因主として言語の統一ないのに歸すべきではあるまいか、第三の要素と言ふのは宗教である、宗教は人の精神を支配するものであるから、同一宗教を信ずる者が同一主義によりて結合し易いことは無論の事である、其證據は、古今東西の歷史に昭々として明である、澤山の歷史を讀む必要はない、一部の十字軍の歷史で十分である、宗教革命史でもよろしい、又我石山軍記を瞥見しても否定は出來まい、獨逸帝國の如きは、ブランデンブルグ大公以來、ホーヘンツォルレルン家には明君が續出して國運最隆盛なれども兎角に聯邦內の結合力の厚くないのは、一には聯邦制度の致す所ならんも又一には聯邦各國が宗派を異にするのが大に與りて力ありである、宗教が違へば親子兄弟でも爭ふ國家に不利益なのを知りつゝ首のやり取りまでします、諸君今より百年以前の歐州の天地を想像せられよ、不世出の英雄ナポレオン一世が、一時彼が如き大勢力を得たりしにも拘らず、一敗地に塗れて、セントヘレナの孤島に怨を呑んで、憐

れ墓ない最後を遂げたは何故でありませうか、彼が人種も異り、言語も違ひ、宗教も亦別々である所の諸國民を一纒にして一大帝國を建設せやうといふのは、眞に無理なる注文で、到底人力に能はざる事を成さんとの空想を實行せやうとした間違より來たのではありますまいか、之に反して此三大要素さへシッカリして具はりて居れば、假令政事上には如何なる變動がありても、其國は大丈夫である、何となれは民心の結合力が堅固であるからである、諸君露國のペートル大帝の事業を見られよ、彼急激なる改革は制度文物を始め一切萬事西歐の事物を輸入して、悉く舊物を打破して新態を取つたけれども、唯一ッ舊物を維持した、否一層盛にしたものがある、夫は申す迄もなく希臘教である、夫故彼の事業には生命あり、活動して今日迄赫々として盛である、彼は死せしも、其計畫は永續して益勢力がある、

我日本を顧みれば、人種は申すまでもなく、雜り氣はない、言語も亦臺灣や北海道の土人を除けば幸に一種である、宗教は如何であらうか、是は我々が痛心に堪へぬ所であります、併しながら唯宗教ばかりではない、我々は曾て人種改良論をも耳にしたことがある、國語改良論も聞いた、國字國文の改良論は今方に盛である、改良は結構であるけれども、今日の如く新舊兩社會の過渡期に當りて、只管流行に驅られて改良騒をするのは慎まねばあらぬ、宗教の如きは最然りで、佛教の門にも入らずして漫りに新來の宗教を歡迎し謳歌せんとするのは、愚であるばかりでなく民心の結合力を弱めて國家の獨立を危くするものではあるまいか、諸君の御熟考を煩はし度いと思ひ升、

論說

獨尊の說

釋宗演

世尊初生周行七步大獅子吼して曰く天上天下唯我獨尊と而して此一語は古今三千年間到る處多數教家の筆舌に由て幾百千回となく操り廻へされたる格言にして言句としては寧ろ頗る陳腐に屬したるものなれども此陳腐なる言句の中に最も斬新なる活力ある大乘の教旨は包括せられ都ての哲理倫理の要義は含蓄せられおるものとして予は常に此言を拳々服膺して措く能はず況や世尊降誕の今月今日に於て幾回此語を提唱するも所謂一回舉看一回新の感に堪へず乃ち獨尊の二字を擇て殊に茲に標榜する所以なり

我は夙に宇宙の實在なるものは無量の時間に亘り無邊の空間を通して不垢不淨不增不減に流行して已むことなきを信ずるものなり但智識の進歩と學問發達の順序として人格的實在は萬有的實在に進化し萬有的實在は倫理的實在に推移す是れ豈に佛に法報應の三身あり法に体相用の三大ありて帝網重々主伴無盡の妙致を顯はす所以にあらずや而して予か所謂獨尊は彼に「ゴット」と云ひ此に佛と云ひ或る一部の教家か唱道する如き一種人格的の神佛を意味するにあらず直言すれば神佛

の元形即倫理倫理即實在なりとの意なり是に由て之を觀れは天上天下唯我獨尊は釋迦老師一己の自讃にあらずして寧ろ我は此倫理的實在の一分身なりと宣示し玉へるなり故に又言ふ奇哉一切衆生悉具有佛智惠德相と或は云ふ一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と或は云ふ心佛及衆生是三無差別と看よ世間何物か絶對的獨尊なるものぞ天高しと雖も地を得すんは未た尊からす君貴しと雖も臣を得すんば未た尊からす是の如く父は子を得て始て尊く貧富貴賤老幼男女より乃ち柳綠花紅烏黑鷺白の末に至るまで皆各々其相對を待て始て貴きを見る是に於か始て知るべし世尊の格言は人格若くは物格の獨尊にあらずして即ち倫理的精神的實在の唯我獨尊を宣示し玉へるなることを

獨逸の碩學「カント」此倫理的實在の獨尊を明かにせんと欲して曰く自己の意思には絶對的に無上の權力を有する一種の命令の聲あり善惡の標準は一に此命令に服從すると否とにありと人或は曰はん此說は極端なる箇人主義にして動もすれば國家の幸福を妨げ社會の安寧を害するものなりと然れども是杞人の憂のみ何となれば「カント」は自己の意思を以て無上の命令者と悟りたると同時に自己の意思の自由を有する如く他人も亦各自意思の自由を有するものと斷定したればなり故に他人の自由を害せざる樣に自己の自由を活動するは即ち自由の法則なりと云へり果して然らば「カント」亦世尊初生の格言に私淑する所あるものに似たり否か

古來此倫理獨尊の聲を認めて或は匹夫志を奪ふ可らすと云ひ或は舜何人ぞ我何人ぞと云ひ又は三世諸佛有ることを知らず狸奴白牯却て有ることを知ると云ふ等其言枚擧に遑あらず中に就て雲門大師最も痛絶快絶の提唱あり曰く佛初生大口を開て云ふ天上天下唯我獨尊と我れ當時若し見ば一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめば且喜すらくは今に到るまで天下太平を致さんと滿堂語君果して能く雲門新定の機を會得するや若し夫れ現成公案如何んと問はゞ我今灌沐諸如來。淨智莊嚴功德聚。五濁衆生令離苦。同證如來淨法身。

右一篇は釋尊降誕祝賀會に寄贈せられたるもの、今本誌に收めて讀者の一覽に供す

* * *

春水溶々綠一川、風光已近蹄青天
三關奥下無閒柳、繫盡春人系錨船

社會

平和主義

平和主義は消極主義也、退嬰主義也、都合よき主義也、國際間の衝突を避くるには平和主義は實に欠くべからざる唯一の利器なり、

吾人は强て平和主義を破壞し排斥するものにあらず、今日世界列國か縱令表面上にもせよ安寧を保持し得らるゝもの、少くとも此平和主義の賜なりと認めざるへからず、然れども外交の要は機先を制するにあり、先ずれば人を制す平和主義を墨守するもの果して他を制する能力を有するや否や、

今や滿州條約は廢棄されたりと雖も、露國の滿州經營に力を注ぎしは一朝一夕の事にあらざるなり、滿州に於ける實權は清國にあらずして却て露國の掌中にあり、條約の廢棄は露國必ずしも痛痒を感せざる所、滿州條約の廢棄に効を奏せしか如しと雖も、其實一滴の効だもあらざるなり、妖雲暗澹依然として天の一角に横れり、責獨り當局者のみに歸すべきにあらず、國民の自警を促すそれ此時にあらむ哉

增俸問題

自らの歳費を增すことを可決したる衆議院が、法官の增俸を否決したるは最も奇怪なる現象と云はざるべからず議員の增俸是なりとせば法官の增俸亦是ならずや、若し議員の體面を汚さゞらむが爲め增俸の理由とせば、條約改正上より法官の位置を高めしに拘らず、司法部の行政部に比して頗る輕きを想はゞ、增俸の理由一概に排斥すべからざるなり、衆議院の否決に至りては毫も其理由を見出す能はざるなり、而して之が爲めに法官をして激動せしめ嚴肅なる司法部内に紛擾を惹起せしめ拭ふべからざる汚點を存せしめたるはこれ誰の責任に歸すべきか、吾人は法官の運動其當を得たるものと信ずる能はず、然れども今日の事法官のみに罪を歸するは蓋し酷なりと云ふべし

感化院設備費概算

（但し收容者三十人の見込）

○第一　創立費

一金貳千七百八圓六拾錢也

内譯

一金貳千貳百五拾圓也　新築費壹坪に付金參拾圓　七十五坪

坪數内譯

居室　貳拾參坪
保母詰所　四坪
浴室　參坪
食堂　七坪
便所　參坪
廊下　七坪
學科手工教場　拾八坪
事務所應接所　拾坪

一金貳百八圓六拾錢也　蒲團及被服

内

金百圓也　蒲團三拾組
但し四布ふとん一枚二布ふとん一枚を一組とす
金百八圓六拾錢　衣服三拾組
但し綿入一枚羽織一枚襦絆壹枚帶一筋を以て一組とす
金百五拾圓　備品及び雜具費
金百圓　雜費

○第二　經常費

一金拾八錢七厘　一日一人平均額

内譯

金五錢　給料

但し貳拾圓給教員一名、拾圓給事務員一名、五圓給小使一名、三圓五拾錢給保母三名の見込

金參錢九厘　米麥代
但し一人に付四合米麥等分の割合
金壹錢五厘　雜費
金貳錢　柴代
金貳錢　治療費
金參厘　被服費
金貳錢五厘　備品費
金壹錢　消耗費
金五厘　

以上

附記、右の調査は東京市養育院幹事安達憲忠氏の爲されしものなり、感化法案一たび出で、本誌幾回か代用感化院の必要を唱導して以後、各地漸く其必要を感じ、或は既に之に着手せるもの三四を下らず、而して之れが必要を認めて、其費額の點に於て本誌の報告を要求し來るもの數個所の多きに至る、本會是に於てか唱導の徒勞ならざりしを喜ぶと同時に費額の調査を公にするの責任を感じ、近來頗る此點に留意して、殊に精確なるものを得んと苦心せしも、斯の如き設備は佛教者が未だ曾て經驗せざる所あるを以て、那邊に於て之が調査を得べきかに苦みき、幸に本會總務員たる安達氏の、既に之れが經驗に熟せるあり、よつて氏に求めて得たるもの即ち是なり

安達氏は養育院に幹事たる十數年、此間始終一日の如く孜々として當て倦まず、養育院が前に本所にありし時は、頗る微々たるものなりしが、其今日小石川に於て彼が如き大組織を爲すに至れるもの、氏も與りて大功あり、現時幾十萬の基本金を積み、猶孳々として進捗の途に在り、月を追ひ年を歴て膨大なるに至るは、澁澤院長の功績の偉大なるは素よりなりと雖、安達氏の熱誠も亦能く此好況を贏ち得たるものならずんばあらず、

安達氏は養育院をして斯る進境に進せしめたりと雖、氏は猶之を以て滿足せず、屈指すれば七年以前より、感化事業の救養と相待ちて實に必要なるを感じ、之が設置の唱導怠らざりしも、時機未だ會せざりしが、感化法案一たび出で、こゝに初て機運に會し今年に至りて、同院内に感化部の設置を見、目下五六十名の不良少年を收容するに至れり安達氏の此事業に關する經歴と、及び經驗とは斯の如くなるを以て右の調査は決して机上の打算に非ずして、悉く是實致より集め來れる者、是此調査の頗る精密にして且つ精確なる所以なりとす、

各地より本會に向て求め來る調査は、概ね漠然として單に感化院設備費といふ、然れども收容者の多少によりて其費目に多少あるべきは勿論、又時價の如何、地方の異同によりても變更あるべきは、素よりの事なりとす、本會は是に於てか氏に依頼するに、三十人を收容すべき感化院の、創立、經常費の打算を以てせり、然れども……氏の調査は都下の時價によるを以て、地方によりて或は創立費の多き

ものあるべく、或は經常費の賸なるものあるべしと雖、大概此標準と大差なかるべし、切に望む、各地同憂諸彦、此標準によりて感化院の設備を爲し、完全なる慈恩の行に出で、以て報國の誠を致し、報敎の忠を盡されん事を、

＊　＊　＊

眞龍女學校の證書授與式

眞龍女學校は淺草松葉町眞龍寺に在り、本會々員安藤鐵腸氏の主幹する佛敎主義慈善女學校なることは本誌かねて報せしが如し、去る三日第二回證書授與式を行ひ二十餘名の生徒にそれ〴〵修業證書を授與し、安藤校長、幷に眞岡本多兩文學士の演說あり、後生徒の佛敎唱歌等あり、以て叮重嚴肅にその式を了へり、當日の來賓は右兩學士の外、柘植、横井、曉鶉、山岸等の諸氏二十餘名ありき、尙同校は今回第四學年を開き、尋常小學の程度を以て貧民の女兒を敎育し、傍ら佛敎の感化を施すに勉め大谷派新法主臺下の贊襄少からずといふ

＊　＊　＊

釋尊降誕會

去る八日例年の如く大日本佛敎青年會にては、第十回釋尊降誕會を神田錦輝館に於て執行せり、帝國大學、第一高等學校慶應義塾、東京專門學校、哲學館、曹洞宗大學林、淨土宗高等學林等に在學の會員は勿論、傍聽者は午前十一時頃より犇々と詰めかけ午後二時頃に至りて滿塲殆と立錐の地なく、爲めに入塲を謝絶せられたるもの幾百名たるを知らざる程なりき、盛會推して以て知るべきあり、

正午に至りて櫨て幹事眞岡湛海氏は開會の辭を述べ、幷せて會の前途に就ての抱負と希望とを述べられ、次に文學士中尾敎嚴氏は青年佛徒の希望と題し、哲學上より時間と空間との二大別をなして滔々之が抱負を吐露し、大に滿塲の喝采を博し次に文學士本多辰次郎氏は國民團結の三大要素といふ題下にて、言語、宗敎、人種の三大別に就て、古今東西の史を引證して辨せられたるは近來の快事なりき（本號社說參看）

次に織田得能師は小乘の佛陀次に齋藤唯信師は佛敎道德の基礎に就て熱心に演せられ次に大内青巒居士は死ぬる覺悟と題し開口一番聽衆をして該諧よく頤を解かしむ、次に南條博士は十度と題して布施、持戒、忍辱、精進、禪那、智惠、方便願力、覺悟、の十度に就て一々詳辯せられ、最後に島地老師は釋尊降誕會に就て懇々講話せられ、此時既に薄暮に近きしを以て匆々の間に演了せられたるは、殘念の事なりき、

右終りて樓上にて茶話會を開く、出席者無慮一千五百餘名混雜名狀すべからず、餘興として能狂言、講談、劍舞、薩摩琵琶等ありて無事散會せしは午後七時頃、因に記す本鄕二丁目の丁酉書店は、毎年生花一式を寄贈せらるゝ由、特志の事と云ふべし

＊　＊　＊

尙關西佛敎青年會にても此日京都眞宗大學講堂に於て降誕祝賀會を開き知名の辯士出演せられ、且つ茶話會をも催し頗る盛會なりしと、又岩手縣各宗協會にても、第三回釋尊降誕會を前澤町西岩寺に開きしに、參拜者凡そ二百餘名嚴肅なる灌沐式あり、引續き佛敎演說會を開き熱心なる講演に聽衆非常に滿足し、無事散會せられたる由通信ありたり

紛々錄

◎流石は都なり、小僧丁稚の慰親會も開かれ、月の三日には二六新聞社の發起にかゝる勞働者大慰親會は花の向島に於て開かれぬ、次には乞食の慰親會迄も開かるゝ事ならむ、去り年ら社會問題が追々頭を擡げつゝあることは事實なり、宗敎家は社會問題を如何解決せんとするか

◎宗敎家殊に佛敎者の事業を見るに一も成効したるものなきは其原因何れに存するか、眞摯の氣象に乏しきは勿論、世の流行を趁ふて輕卒事を企つるにあり豈慨すべきの至りならずや

◎之を各宗の事業の上に於て見るも亦然り、朝に布敎所を開き夕に之を閉ち、所謂朝令暮改は彼等の常なり、如何ぞ刻鐵の見るべきものあらむや、

◎上野、向島の花は海に麗麗なる哉、花みる人の蟻の如く集まれる慰花よりも一層見事に感ぜられぬ、

◎告ぐるものあり、滿都の士女は一年の行樂此時にありと、花にして若し靈あらば百年の知己を得たるを喜ぶならむか、否か、

◎貴紳あり、書生あり、職人あり、非人あり、乞食あり共に來りて花下に逍遙し嬉戲すれども、研麗の風姿替て改めざるなり、花神亦ありて然る歟、何ぞ平等慈悲の佛陀に相似たるや

◎英雄の末路悲むべし、落花の繽紛として地に舞ふの狀甚だ床しき風情あり

◎去れども、我庭前の老樹、夜來風雨の爲め紛紅碎白悲く地に委し泥土に歸したるは蓋し遺憾無量

雜錄

西教事情（緒言、四）

佛國（續）　近角常觀

萬國宗敎歷史大會の報道を一讀せられたるの人は、西人か佛敎を信奉し、佛耶兩敎一堂の下に會合して世界的傳道にても講じたるかの如き速斷を下さば大なる誤解なり、既に其名の示すが如き學者の會合にして且つ研究的態度を取れるに外ならず、而して實際其社會に於て信仰を支配しつゝある宗敎の狀態は如何、正に是れ羅馬舊敎の根據地、敎國主義の本家にして、蘇耶敎本來の面目を顯はせるもの、見聞する處心を寒くせしむるものあり、舊敎の現勢につきては他日詳論することゝし、今は其一斑を列記せむ、

佛國に於ける舊敎信徒の總數は三千九百萬にして新敎は僅かに九萬猶太敎一萬と云ふを以て見れは先づ其大勢知るべきなり、國家はナポレオンの締結せる宗敎條約を盾として其勢力を支へむと勉めつゝありと雖、實力は中々侮るべからざるものあり、全國十八のアーチビショップ七十二のビショップ（宗敎條約には前者十八後者五十八の筈）ありて寺領組織を以て全國を總轄すること恰も英國々敎の如し、巴里にはフランソア、アリー、ベンジャミン、リシャードがカ！ヂナルとして總轄し市内は二大敎區七十一の寺領に分たる、而して此等の敎區組織を以て縱の組織とせは横の組織とも謂つへき僧若くは尼の組合あり、是實にオルデンなるもの舊敎傳道の精兵にして最も注意を要するもの僧に屬するもの三十九尼に屬するもの一百なり、各其組合の性質に隨て其事業を異にすと雖何れも猛烈なる手段を以て敎域の擴張に勉めつゝあり、現時最も勢力あるものはフレール、デ、ゼコール、クレチエネなるものにして敎育事業慈善事業を主とし其成績非常なり昨年に

於て同組合に屬する學校生徒數佛國内にて二十萬八千一百三十二人佛國外にて三十二萬二千五百七十三人あり、予其本部を訪ひたるに舊教としては意外なる寛容を以て予を遇し秘密に屬する上記の統計を示せり、次に勢力あるはゼシユイット及びドミニカンなり、此二者は宗教改革後猛然として起り獨逸に於ける半分を新教より回復したる者にして特にゼシユイユットは世人の知る如く舊教中極端なる組合にして嚴格なる訓練を以て國家となく社會となく、向ふ處悉く破壞して猛進する者、其本部を訪ふ、二重の鐵門ありて、如何にするも門番の僧は予等をして其内部を窺ひ知る能はさらしむ、ドミニカンは熱心なる傳道説教を主とするものにして、常に各家に就きて説き且つ之を印刷に附して配布することを主とす、又フランシスカンも勢力あり殊に其一派カピタンなるものあり、常に褐色の衣を着し、繩帶を纏ひ、殆むと頭の全部を剃り革を以て作れる板の如きを穿ち足を露はして行く何れも自ら處するに極端なる制欲主義、遁世主義を以てし、一方には濟世の方策を講して社會上に事業を經營し來る、尼の如きは常に病人の看護、貧民の世話を事として他に餘念なし、其國家社會上非常の害毒をなすにも拘らず、益〻其勢力の盛なるもの偶然にあらざるなり、今年に入りて佛國内閣は一種の會合條例を議會に提出してオルデンを抑壓せむと企てつゝあるも失敗に屬せむとし、獨逸に於ては舊教黨たるウルトラモンタンは宗教自由を口實として議案を本年の議會に提出して、オンデンの禁を解かむとせり、政府の反對によりて事成らざりしも以て其勢を卜すべし、而して衰微の西班牙は今や正さに國民か反オンデン的運動の爲に大に蜂起し、一揆鎮撫の爲めに政府は戒嚴令を布きつゝあるにあらずや、清國事變に於ける宗教的關係の要點は果して能く洞察する人ありや、我國十萬の耶蘇教中其半數は舊教に屬するにあらずや、米國の新天地最も多數の信徒を有して非常の速度を增殖するは實に舊教にあらずや、予の米國バーチモアーにカーデナルキッボン氏に遇ひたる時、氏は其歐洲に比すれは傳道の自由にして好望なるを叙し且つ曰く新教は數百の分派をなすも舊教は此の如き多數の信徒皆予か配下に一轄せりと揚言せり國家宗教の關係に注目するの人は已上の言論に耳を傾けよ、冀くは予を宗派的感情を以て立言するものとなす勿れ、予は精確なる事實を以て警戒する者、予は實に言はむと欲する十分の一をも言はざるなり

（未完）

臺灣だより

在臺灣　柴田生

◎何か面白き事かゝづり御報道申上度候得共、渡臺以來僅に四ケ月を經たるのみにて、我足跡は臺北の一部に限られ、見聞狹く觀察は卑く、且つや何處に居ても無性なる我は變らず、訪問は更なり跋渉も欲せず、隨つて當地の事情知るに由なく、此にたゞ〳〵道聽途説の片言を綴りて聊か責を塞ぎぬ、

◎臺灣と申せば日清戰役の紀念物、帝國の同化力御民術の試驗場として、熱心之れが開發に盡さゝるべからざる事ながら、實際國民には輕視され卑しき所愚人の集合地と認められ、其政治教育に注意する人は恐らく百中の二三も六ヶ敷きかと存候、

◎とは申するものゝ渡臺以前の我は同樣に輕視致居り一向不案内にて候ひし、艙の始めて基隆に達するや、辮髮左衽の土人が繰る戎克船の蟻集に第一の異樣を感じ候、四畫夜航海の勞を醫せんとて急ぎ上陸すれば、不潔は疾く耳にする所とて左程に思はねど、無風流なる赤瓦赤磚化の光線惡しき家屋は南海の未開地たる感を深からしめ、次て氣車にて臺北に向へば速力の緩き煤煙の多き停車場の哀れなるは誰人も氣は付く事に候、窓外を望めば農耕の業は非常に發達し、墾模も餘程大きく家に水牛を畜ふて鋤犂の勞に役し、山巔に至る迄耕作さるゝを見受け候、

◎かくて臺北に着し、城壁に開かれたる北門を過ぎて所謂城内に入れば、光景一變、こゝは内地人の淵叢とて建築の土人風なる外は殆んど内地と異るなく、道路整ひ商舗軒を列ぶる狀を見ては案外に思はれ殊に下水の完備せる恐らく内地に於て見る能はざる所に候こは内務省御雇故バルトン氏がマラリア病の多きは下水の不備にありとし、熱心之れが修築に力められしものにて。爾來名物の蚊軍は大に衰頽しマラリア患者も著しく減少致候由、此事は少くとも永く臺北人民か氏に對し感謝すべき事と存候

◎さて宗教界の事、こは少々生には判り兼ね候へども聞く所によれば内地より布教師の派遣され居る宗派は、眞言、淨土、西本願寺、東本願寺、曹洞、臨濟、日蓮の七宗にて、何れも臺北に布教場を構へ三四人宛の僧侶在住致居候、此の中西本願寺と曹洞宗とは最も早きものにて征臺軍に從ひ來りし由に候、

◎宗派少きにあらず僧侶また乏しきにあらず、されぞこは數字上の事にてすべて睡れる宗派と死せる僧侶のみなるは餘所目にも憐むべき事に候、うも此等の本山より派遣されたる僧侶は何事をかなす我は之れを報道するは深く好まざる所、また開くを欲し玉はざらめど、云はざるは不實なり我は且らく忍んで之れを語らん、

◎餘所は知らず臺北にては何れの宗派も申合せたらん如く土人布教を放棄致居候、嘗ては土人間を奔走し廣告札の如く切りに信徒章を配付して得々信徒幾千人と號し、或は廟寺を己が宗派に屬せしめんとして互に競爭を試み、幸に官衙の認諾を得て麗はしく何宗末寺の門標を揭け、爲に土人の峻拒を招きし如き痴態まで演せし程熱心なりしものか、今や悉く棄てゝ顧みるなし、何う往日の意氣に背くの甚しき實に奇怪の至りに候、

◎之れが辯明として彼等は聲を揃へて叫ぶらく、資金多からず、任に當る人なく、且土人の道義は壞敗其極に達し殆んと導き難ければなりと、知らず世には本山特派の布教師より發せられたる此簡單なる辨解にて滿足する人有之候や、資金の乏しき豈佛界のみに限るべき、何れも同樣に候へは以て理由

とするに足らず、言語不通の困難と土人の腐敗は、幾百里の海波を越て南陲の新領土に望むものゝ豫め期すべき所のものなり、渡臺の後漸く之れを覺りたりとは驚き入り候はすや、

◎かゝる見易き事情を知らさる筈あるべき、恐らく彼等か豫想外に困難なる故なるべし、されぞ之れ程の困難に堪る氣力なきとは返す〳〵も哀むへき事に候、隨分外國宣教師には廿餘年臺灣に止り、僅に三名の信徒を得たるのみにて落膽せさる程のものも少なからさるに、

◎土人の不道義は教へて導き能はすとは、確に彼等か無氣力を自白せるものに候、基督教は頗ふる盛んにて熱心なる信者も少からす、毎日曜には詣者禮拜堂に充つる有樣に候、基督教にして能く之れを爲し得るに、いかで古來佛を信ずる土民を眞佛徒たらしめ難かるべき、然れぞも基教は數十年間あらゆる困難に打ち勝ち撓まずして今日に至りしものにて、佛教は兩三年の辛棒だに出來ずして敗れたるものに候、

◎土人布教を爲さずとせば彼等は平素何をかなす、之れなり〳〵我は斷言す彼等は何事をもなさず、たゞ毎月幾回かの説教を內地人に向つて行ひ、幸ひに閑散事なき廢餘の老人の消暇場たらしめ、往々醜聞を新聞紙上に暴露する外は、讀經と死人取扱に過ぎず候、

◎惡みても餘りあるは、一般に內地人の智識の度低きに乘じ稻荷辨天淸正公抔を祀り込み加持祈禱を專務とするもの有之事に候、之れが臺北に於ける各派布教の狀態なりとは如何に思召すや、有爲の僧侶諸師の奮發を仰ぎ度候、併し之れは臺北の狀態に候臺中臺南抔には學校迄設けて土人布教に盡さゝゝありとか、固く累を他に及ぼさゝらん樣願上候、

◎初めの約に背き禿筆走りてつい妙な氣焰を吐き候、語らば尙多かるべけれども今回は之れにて御免蒙り、書餘は後便にて貴意を得べく候（四月二日）

＊　＊　＊　＊　＊

秀才あり和尙に問ふて曰く爾等の經典、內に南無の二字あり、何が爲めに念じて那摩となすや、僧曰ふ、相公の四書、上に於戲の二字あり、何の爲めに讀んで、嗚呼と作すや、如今相公若し於戲と讀さば、小僧は南無と念せん、相公若し是れ嗚呼ならば小僧自ら那摩を要すと

今昔

新山吹譚（つゞき）

甲南生

文學者としての道灌及び其文學史上に於ける位置

世は苅菰と亂れつ、殺氣六十餘州の天を覆め、妖雲深く閉して天日爲めに暗く、淒風吹き荒みて騷擾絶ゆる閑なき足利の季世は、げに淺間しき世の樣なりけり、强きは虎狼の牙を磨きて呑噬の慾を逞しうし弱きは戰々として僅に一日の安を累卵の危きに繫ぎ、夕の命朝をはからず朝の運また夕を俟たぬ有爲轉變、はかなき露閃めく電の消ゆるに早きうたての世は修羅の獨の面のあたりこの世に起りし如くにてやがて來るべき應仁の亂れは早く文明の末に兆しうめたるなり、されば都には足利氏昔日の威信漸やく地に委し宰臣權を專らにして互に爭鬪を事とし政令嘗はかりも下に行はれず地方の豪族擅まゝに近隣を蠶食して勢漸く盛んに、日として劍戟の響を聞かざるなく、矢叫の聲に枕を蹴つて立つ折も少なからざりき、かゝる折柄とて人は皆武の片道に馳せ、朝日に匂ふ山櫻のそれにも增して麗はしかりし大日の本の文の道、今はたいたくも荒廢に歸し、彝倫の亂れすさまじく臣は其君を弑し子は其父を殺し兄弟相傷り夫婦相欺き、さながら鬼畜の樣に異らず、さればかゝる溷濁の世に生れ合せたる人誰れかは閑けき春の心してんや、まして武夫の家に生れ兵馬倥偬の間に人と成りし者ならんには、なぞて文の林に分け入りて言葉の花を摘むの閑あらんや、かゝる時世に遭逢して悠々文學の道に志を致し思を風流の遊びに耽けらす者あらばそは誠に匹稀れなる英雄といふべき道灌は正にこの人なりき、

道灌の歌人として當時其名の嘖々たりしは既にいへり、こは正しく其家庭に於ける教育の然らしめし處父道眞の導き與つて多きに居るは疑なきところにて竟に父のみならず其祖父資房も歌の道に精しかりしといへば、彼の家は昔より文學に志厚かりしなるべし、彼の詠にかゝる國風は花月百首平安紀行江戸歌合に數多見えたるが想といひ調といひ洵に麗しきものいと多し世には慕京集を道灌の歌集の如くいへれぞそは誤りにて後人の集めたるものなるは備中の守とあるべきを伊豆守と書きたる、道眞の歌の數多混りたるおぞにて容易に知る事を得べからん、されぞ道灌の歌も固よりこの中にあるは疑なく只そが道灌自らの手に成りしにはあらずといふ迄なり花月百首は彼の詠百首を集めたるにて飛鳥井權大納言雅親の加點したるものにて奥書に「僻黑四十五點太田道灌花月百首飛鳥井亞相親卿の點」と記し「右百首自相州鎌倉比企谷泰雲寺傳寫之献藤左府二條殿者也天正十二年下旬七日藤雅春」と記せり今其秀逸と思はるゝもつ三四を擧げん

ちりまかふ花のさかりは我ならぬ人も心や空に成るらん

點　感吟あまりある事か

今よりは花の心にまかせてん惜むにつけて散も社すれ

足引の山もかひなくうつもれぬ雲も霞も花の匂ひに

優にきこへ候

おしめども日數つもれは飛鳥川淵瀨もわかぬ花の白浪

散りはてゝいとゞ昔や忍ばれんえかの都の花のさかりは

眺てもなくさみぬへき秋の夜の月に涙のいかで落らん

みよしのゝ花の盛もゆく雁やおのが心の雪と見るらん

尤もあはれに候

もみぢ葉に草一入をさしそへて時雨にはるゝ山の端の月

風情艶にきこへ候

露玄けき淺茅が原を分くれは袖に亂るゝ秋の夜の月

あらざらん後の暗路もてらさなんおなじ都の秋の夜の月

こなたにかよふ心にやあはれに候殊さら此たびの行軍は大切にや候はんとおもひよられたる趣尤も感ありて聞え候

いかにせん袖には露をのこし置てくれ行秋の山のはの月
ありしにもあらぬ憂身の秋をへてなるゝも辛き袖の月影
もろともに月もうきぬや忍らん物思ふ袖に影もはなれず
尤も感心候

打物取りては鬼神をも取ひしぐべき武夫の口よりかゝる優美の言の葉を聞くに至りては全く別人の感なしとせんや關東騒亂の間に處して悠々自適するもの何等の餘裕ぞ何等の雅懐ぞ非凡の英物にして始めてこの閑日月あり、

文明六年六月十七日歌合を江戸城に開き當時一流の歌匠曾心敬を招致して判者にあて、孝範、平盛、珠阿、資後、資常、資忠、等の一門同族を會して其詠を闘はしめたるものは江戸歌合なり、

左　孝範　木戸参河守

去ぬとふく奥のくしらのわさならて一すち曇る夕立の空

右勝　道灌

海原や水まくたつの雲の浪はやくもかへす夕立の雨

この書の奥書は藤原の光廣卿にして歌道の大匠と稱せられたる人なり寛永十三年五月十八日の日附にて太田道灌六代の孫備中守源朝臣資宗令予謄寫之云々とあり

文明十二年六月彼の再び上洛を企つるや途次各所の名跡古址を訪ねて恣まゝに雅興をやり、至る處歌を詠して風月に嘯きし者集めて平安紀行の一小冊を爲す其序に「文明十あまり二とせのころ水無月のはしめつかた云々避暑の床をはなれて都にまうのぼりぬ云々結城三郎兵衛藤原重紀小笠原九大夫源忠貞に城を殘し置く云々」とあり、この年は恰かも長尾景春の亂平定し公方成氏も古賀に歸座し關東の擾亂一時靜謐に歸したるより二年後の事なれば數年戰陣の塵に塗れたる俗膓を洗濯し且つは洛に入りて月卿雲客の風流たるに交らひ月花のながめにあくがれんとてなりき、載するところの詠中愛唱すべきものいと多し

いさことといふ所にて
かもめぬるいさこの里を來て見れは遥かに通ふ沖の浦風

平塚にて
憐てふたか世のゑるし朽はてゝかたみもみえぬ平塚の里
はこの山によちのはるに從兵にひやせし酒のませ
みつ粉みつからも喰してなん心をやること云ばし
斗なり

箱根山あくる雲井の郭公みちさまたけの一聲もうし
富士の山雲かゝりてさらに見えず
心あてにそれかとろ見る白雲の八重かさなれる富士の芝山
沖津の宿にいたりぬ庵主民部入道禪道覺をまけてからうた二つ作りてこされしにこれも詩にて心はへあはれに旅の心はへうつしやりぬ見わたすけしきこのかみ見しにもはるかにまされり云々
されは彼は啻に和歌に巧妙なりしのみならで詩もまたよくせしと見ゆ

清見潟にて
きよみかた浪の關守ゆふ暮にとまるは月の光なりけり

逢坂山をこゆるとき
旅人に逢さかやさは霧こめて行もかへるも分かぬこゝろ哉

此時もまた將軍義尚に謁して成氏の旨を達し且つ關東鎮定の條を陳す將軍厚く之を慰ふ

（未完）

新刊紹介

宗教管見　發行所　京都東六條　法藏館

楠龍造君著

愚に龍樹の佛教を著したる楠君は、今また本書を公にせらる、著者の宗教に熱心なる吾等の覓に及ばざる所、本書愿して宗教管見と云ふも論旨主として佛教の見地に立て觀察を下したるものなり、第一章の「人は自己を自覺せざるべからざる」より「自己の運命」即ち第五章に至る迄、人生の營々促々何事をなすべきか說き、次の三章は信仰上に論及し、次の六章は吾人の立脚地は佛教にあるとを論述し、最後に著者の友人たる曾我君の「予が信仰」を愿する一文を附錄として添へたり、信仰問題の旺盛なる今日必ず一讀せざるべからざるの眞書なり、

（定價貳拾錢）

佛教の女子　東京麻布飯倉町　森江書店

山田文昭君著

本書は初め現今女子のいたく腐敗したるを慨し、之を匡正し健全なる女流の性格を作らむとするには佛教に依らざるべからざるを說き、終りに大慈悲の光明の上に心靈の基礎を據ゑて生命ある女德を養成せられんことを望みたり、稍偏見の嫌なきにしもあらざれども、議論の穩當なる實に喜ぶべし（定價三拾五錢）

東洋史要　大阪　積善館

文學士野村辰造君
文學士本多次郎君　共編

本書は中學校、師範學校等に於ける東洋史の教科書に充てむが爲めに編纂せられたるものにして、敘事簡明文章亦平易にして、絶ゑて難澁の句なく加ふるに著者が年來の經驗より古代を敘する簡單を旨として、近世に至るに從ひ詳說したるは、教科書としては最も適當の事ならんと信ず　（定價六拾錢）

本部廣告

第二北海道移住手引草

今回北海道廳殖民部拓殖課編纂ニシテ北海道ノ概況及ヒ本年貸付スヘキ區劃地ノ圖面出願手續移住心得等ノ大要ヲ記載シタル一枚摺ノ出版物ニシテ北海道ニ志望アルモノハ一頒ノ價値アリ（但シ郵券貳錢ヲ添ヘ北海道廳殖民部拓殖課ヘ申込メハ一名ニ一部限リ無代價ニテ送付セラル、筈ナリト云フ）

一、本誌購讀料未納諸君は何分至急御拂込被成下度、若し未納金高不分明に御座候はゞ往復はがきにて御照會願上候
一、本誌發行の儀に付俄然故障相生じ不得止延引仕候段讀者諸君に謹謝候

大日本佛教徒同盟會出版部

四　月

老川遺稿出板費領收廣告（第六回）

金三十錢	紀伊	銅貫祐民君	
金五十錢	同	和田勝賢君	
金一圓	大阪	西岡恒之進君	
金五十錢	同	佐藤政太郎君	
金五十錢	同	佐藤竹次郎君	
金五十錢	河内	植島龜太郎君	
金五十錢	近江	小島伊三郎君	
金七十錢	尾張	簑浦義賢君	
金七十錢	大阪	太田庸得君	
金七十錢	同	兒玉元之助君	
金五十錢	紀伊	吉田惠陸君	

金五十錢　紀伊　村山證顯君
金五十錢　同　松本純乘君
金五十錢　同　島實乘君
金五十錢　同　岸畑源吉君
金五十錢　同　辻本義淳君
小計　金八圓九十錢
通計　金九十九圓六十五錢也

第十回釋尊降誕會寄附金領收廣告（第一回）

一金二十五圓八十錢　淨土宗高等學院
內金二圓山本大善君、金一圓望月信亨君
金一圓職員御中、金一圓佐藤慶輝君藤田寛隨君、金二十圓八十錢學生諸君一同、

一金二十圓　東亞佛教會
一金五十錢　鳥越順回君
仝　佐々木月樵君
仝　多田鼎君
仝　中原菊英君
仝　長谷川基君
仝　三宅しづ君
仝　百目木智蓮君
仝　松本順乘君
一金七十錢　曉烏敏君
一金一圓　杉谷泰山君
仝　加藤玄智君
仝　栗木智堂君
仝　東谷智源君
仝　武宮環君
仝　酒生惠眼君
仝　中尾教嚴君
仝　佐竹觀海君
仝　島地默雷君
仝　本多辰次郎君
仝　丸山環君
仝　齋藤唯信君
一金一圓七十錢　廣田一乘君
一金二圓　眞淨寺殿
一金一圓五十錢　清澤滿之君
仝　月見覺了君
一金一圓　杉村廣太郎君
一金五十錢　同君　取次
一金二圓　鈴木民作君
一金一圓五十錢　吉田賢龍君
一金二圓　和栗峰吉君
一金一圓五十錢　高等師範學校依田豊君取次
一金一圓六十五錢　曹洞宗中學林有志諸君
一金十四圓　曹洞宗大學林有志諸君
一金一圓八十錢　日蓮宗大檀林有志諸君
一金六圓六十錢　佛教高等中學有志諸君
一金五圓二十錢　慶應義塾內佛教會御中
小計　金百〇六圓九十五錢也

造花一式　本郷一丁目丁酉書店主、鈴木泰君寄贈

明治三十四年四月　右　大日本佛教青年會

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

信仰の餘瀝

全一冊　寸珍美本　紙數百頁餘

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵稅不要●郵券代用一割增●殘部少々有之候間速に御注文を乞ふ

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯綜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして戛然胸中秘奧の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをすゝむ、

一、宗教的同朋。　二、活ける懺悔。
三、外、柔にして、內、剛なるべし。
四、聲をきくべし、光を見るべし。
五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
六、佛の人格。
七、地を固く踏めざれど常に步を進めよ。
八、信界に於ける監獄。
九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
一一、因果應報は宗教的自覺なり。
一二、相對世界の眞相。
一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
一四、佛陀を近きに求めよ。
一五、信念の修養は實際問題に如くなし。

發行所　東京本郷森川町一番地　大日本佛教徒同盟會出版部

文學士野村浩一
文學士本多辰次郎共著

新編東洋史要

全一冊紙數百六十餘頁　定價金六拾錢

本書は中等教育を施すべき諸學校の教科書に宛てむが爲に編纂せり

本書の特色は左の如し

第一叙述簡明正確なり　正確なる智識を順序正しく生徒に與ふる事は中等教育に於て最必要とする所なり本書は此點に注意して全體の分量を簡にして彼雜駁なる智識を多量に强いて注入せんとする弊害を排除せんことを力めたり

第二文章平易明瞭なり　近來中等教育を受くる學生は漸く漢文の學力を減じたれば本書は力めて文章を平易にして難解の辭句の爲に歷史智識を得るを妨げんとする弊害を除去せんと注意したり

第三記事繁簡當を得　長き時代と廣き邦土とを包含する歷史を僅少の時間內に教授せんとする爲古代に精しくして却て比較的必要大なる近世史を粗にする東洋史教授の通患なり本書は此弊に鑑み古代を簡單にして近世に至るに從て比較的詳說したり

右は著者が年來の教授の經驗に徵して感する所なり是れ本書を編纂して世に問ふ所以なり

發賣所　大阪市東區安土町四丁目　積善館

政教時報第五十三號毎月二回一日十五日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十四年四月十五日發兌

毎月一回(十五日)發○壹部拾貳錢○壹年壹圓貳拾錢

精神界

四月十五日　{第四號}　發行

東京本郷區森川町壹番地二百四拾壹號・浩々洞

精神界
◎科學と宗教◎信せざる能はざるか故に信ず◎犯罪人の宗教◎藉益大師曰く◎「神」といふ名、「佛」といふ名◎春光　論説　齋藤唯信
◎佛教道德の根本原理　境野黃洋
◎人間の道德　朝永三十郎
◎非人格的證樓の福音　解釋　浩々洞註
◎雪山林下の聲　多田鼎
◎心靈の歸泊　講話　清澤滿之
◎遠美近醜　眞岡浩海
◎我は呼吸の間に在り　感興　青鬼堂
◎親鸞聖人の誕生　みつまろ苓
◎摘みくさ　獨泊
◎花御堂　雜纂　佐々木月樵
◎名なき野の花　近藤杜葉
◎去年の春　鳳氣至共雄
◎生死巖頭　曉鳥敏
◎紅白日記　社會
◎文明の敵、文明の服役者◎日露の間◎戰の可否◎司法官のストライキ◎都鄙小觀●報道◎東京たより◎布哇たより◎越後たより◎關西の花束

◉發行所　大日本佛教徒同盟會出版部

日本公論
定價一冊金一十錢
(稅不要)一圓二十錢
郵税二年

四月一日發行第十六年第四號要目
口繪●錫蘭寒泥舊都の風光
公論　常識以外の道德●星亨と伊東巳代治●世界的知識の養成所●海外新潮　道德宗教界の前世紀◎米國の進歩と歐洲の驚慌◎博識先生の談片●鐵道布教の効果●文明と野蠻　雜錄　芸窓隨筆◎詩人としての湖山翁　瓦礫　文學博士坪井正五郎　東京府の暗黑面　其一娼妓の方面　教界人物評●詞藻　俳句苗代(四方太撰)　漢詩櫻花(柳塘撰)●紀行　北極探遊記　清蔭　思潮　歐米學生の氣風外數件評　都下の文豪　文藝小觀◎宗教評論　文壇　讀者の論壇　政界漫言◎教育時評◎社會彙報◎教育彙報●宗教彙報　一掃百塵●睥睨錄　我邦將來の商業　新刊◎

發賣所　東京本郷四丁目五番地　(電話本局九一九)　全社